

いばらの道か白道か

甲「先生、私は、如来様がおいですることもわかっていますし、私が悪人であることも知っていますが、どうしても信心が頂かれませんか。どうしたらご信心がはつきりわかるのでしょうか。」

乙「それは、わかったと言っていていられても、如来が真にわからず、またあなた自身もまだわからないのです。」

甲「それはそうでございましょう。なぜ、如来が真にわからないのでしょうか。」

乙「あなたに問うて見ます。あなたは何のために法を聞くのです。ここには何をするために来たのです。」

甲「そうおいつめられると困りますが、今日の生活が不徹底なために、苦しみますので、楽になりたいためであります。」

乙「楽になりたい………。何年寺に参りますか、」

甲「二十年ぐらい。」

乙「二十年寺に参つて、楽になれましたか。」

甲「楽になれるどころか、時々ああこの心なればと思つたこともありましたが、それは一時の酔いでありました。近ごろこれではいけないと本気になりはじめますと、明るいどころか、いよいよ暗く、苦しくなつてまいります。しよせん楽にはなれません。」

乙「すると、楽になりたいと思うて求めたあなたは間違つていたのだとわかりました。間違つている者に間違いはわかりません。自力の小路にふみ迷いつつ行くべき里も忘れ、出ることも願わず、ただ、今日、今の眼の前の苦にのみ囚われてみると、あなたの道は荊棘の道となつてしまいます。あなたの道は、清水のわかぬ沙漠になつてしまいます。地獄では、渴愛（享楽）を求めることいよいよ切にして、獄卒はいよいよ熱鉄の湯玉を飲ますという。あなたには道がほしかったのではない、楽がほしかったのだ。如来が恋しかったのではない、楽がほしかったのだ。あなたは正法に生きようとしたのではない。楽に生きようとしたのだ。あなたは真理を求めたのではない、楽を求めたのだ。善知識（僧）を求めたのではない、あなたの安価な慰安者としての人を求めたのだ。そうした一切があなたの道をいばらの道にする。苦しいいばらの道をさけようとて、苦を離れて楽な小路に入ろうとして、いよいよ自縄自縛のつるにまかれて、いばらの道はいよいよいばらになるのです。」

甲「でも私は楽がほしいのです。聞けば聞くだけ、今の今も、刻々に苦しくなります。苦しくなればなるだけ『楽になりたい！』ただそれだけで一ぱいです。」

乙「それは、地獄への道だ！」

甲「それでも私は楽になりたいのでございます。」

乙「楽になりたければ、酒か、遊興か、享楽の道に行くのです。」

甲「それで満足はできません。それでは満たされないことを知りました。私のこの淋しき、苦しさを満たしてくれるものが宗教ではないのですか。」

乙「その宗教には幾度か、だまされたではないか。酒や、阿片のかわりとしての宗教には、信仰には。私は今、二度とそれに行かせはしない。正法を聞くのだ。大法を聞くのだ、如来の招喚に生きるのだ。白道を歩ませていただくのだ。」

甲「そのことが、私が楽になる道ではありませんか。」

乙「楽に生きるのではない、如来に生きるのだ。主君の心に生きた大石由良之助のように。それがよしどんな火の中だろうと、苦の中だろうと、行かねばならぬ一本道を。あなたのように楽が的で、如来を引合いに出して、功利的な満足を得ようとする者は、この一席で卒業しようとする。偉大な未来を持つのが正定聚不退の菩薩である。彼はこれからだと出発点に立つのに対して、あなたは、赤穂落日の秋における大野九郎兵衛のように、なるべく多くの軍用金の分け前をとるのをもつて最後としようとする。その態度が、如来に反逆して、流転する者の相である。『逆』の中から、無間地獄が生まれる。あなたの道は、地獄への道、いばらの道となる。苦しいのが人生である。楽しいものだとは信じようとする所に、根本の誤りがあります。あなたは、私の話で卒業しようとする。私は、そのあなたの間違いをたたき直そうとする。だが、楽になりたいならばどんなにでも楽になろうと懸命にはからつてごらん。あせればあせるだけ、どうなるのか。」

甲「先生どうにかしてください。」

乙「知りません。あなたは私にさえ用事はないのです。楽になったら私にさえ用事はないのです。楽になりなさい。しつかりやりなさい。正法も、如来も、一切を尻の下に置いて、あなたが楽になるために。ああ恐るべきあなたの相。」

甲「……………（十分間沈黙）……………先生！間違っていました。」

乙「わかりましたか。あなたのご家庭だつて、楽のしたい者ばかり集まつたらどうします。そこには地獄のような所ができます。楽があたりまえだと考えて、さらに楽になるために、仏教までひきよせる。その態度こそ自力の親玉です。その親玉の正体を見ましたか。」

甲「わかりました。こやつにだまされていたのです。もうだまされません。如来招喚の声がはじめて聞こえます。歩みます。一切の業苦を背負つて立ちます。合掌して立ちます。私は、まったく苦を逃避しようとしていました。如来にむかないで、変な方向を見つめていたのです。」

乙「法蔵菩薩の偈をいっしょに力強く読みましょう。」

仮令身止 たとい身を

諸苦毒中 諸の苦毒の中におくとも

我行精進 我が行は精進にして

忍終不悔 忍んで終に悔いじ。

もう一度読みましょう。この心です。南無阿弥陀仏の親心です。

『念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候。』苦悩の中に、願力に目覚めるのです。如来の本願力は、大地にわれを生かす力です。そこからのみいばらの道は白道に変わります。全身全霊はただ、絶対自由の大信海、南無阿弥陀仏の中に生きます。苦楽二境に随順しつつ。」

甲「生きられます生きられます。ありがとうございます。」